

氏 名 岡村 敬二

学位（専攻分野） 博士（学術）

学位記番号 総研大乙第 153 号

学位授与の日付 平成 18 年 3 月 24 日

学位授与の要件 学位規則第 6 条第 2 項該当

学位論文題目 日満文化協会の歴史 —創設から解散まで—

論文審査委員	主 査 教授	鈴木 貞美
	教授	白幡 洋三郎
	助教授	劉 建輝
	教授	井村 哲朗（新潟大学）
	助教授	川島 真（北海道大学）

別添 博士論文要旨

日満文化協会は満洲国建国後の文化政策を担うことを目的として昭和8年10月に創設された。それは、日本側の日満文化協会と満洲国側の満日文化協会とからなり、役員には日本側からは内藤湖南・服部宇之吉・池内宏・狩野直喜・羽田亨らの学者のほか実務を担当した水野梅暁らが名を連ね、満洲国側では鄭孝胥・宝熙・羅振玉・榮厚・熙洽ら満洲国の要人のほかに宇佐美勝夫・筑紫熊七・田辺治通ら満洲国政府の日本人官僚、それと事務局を預かる杉村勇造らがメンバーとなって構成されていた。

この日満文化協会創設にいたるまでには、日・満、軍・官、学者それぞれの間で思惑や経緯があり、関係はたいそう複雑で錯綜したものであった。そのなか日本側で大きな役割を演じたのは病中ながら常任理事に就任した湖南であったが、湖南は協会創設後1年たため間に死去しこの協会の活動が湖南最晩年のものとなった。また協会創設および満洲国文物保全のためのメッセンジャーとなって日満両国を往来した理事の梅暁も事務的折衝などで活発に活動し満洲国の建国記念として出版される刻絲刺繍などの保全にも尽力した。なお満洲国側で重要な役割を演じたのはたのは常任理事の羅振玉であった。

この時期満洲国ではすでに満洲国立奉天図書館を成立せしめており各種档案や文溯閣の文物はここで保全されていたが、他の文物などを展示保存するための博物館設置も日程にあがっていた。協会の学者は文化研究院の設置を希望したのであったが、予算上の制約や官僚らの思惑もからんで結局協会は奉天図書館に同伴するかたちで創設され、満洲国建国時期から日本敗戦にいたるまで、文化・学術振興のために活動を展開したのであった。

さて本論では、満洲国建国時から日本敗戦まで持続して活動を展開した日満（満日）文化協会の総過程を、(1) 創設までの前史、(2) 人事等いささかの混乱のあと陣営が確定した昭和9年2月までの草創期、(3) 主として建国記念資料複製事業や遺跡や建築物の保存、各種資料の刊行など研究者提唱の活動がなされた昭和9年2月から昭和12年の訪日記念美術展覧会までの時期、(4) 展覧会を契機として満洲国内での文芸や美術などの文化活動にも目を向けその振興に励んだ昭和12年から昭和15年末の国務院弘報処成立と翌年の「芸文指導要綱」までの時期、(5) 一大統制機関である弘報処設置によって文化運動や文化振興活動が満洲国政府に回収され一元的に統制されて敗戦まで持続していく昭和16年末以降の時期、この5期に区分して論述していった。

このように活動を展開した日満文化協会であるが、その個々の活動はどれをとっても興味深いものがある。そのなかで長い期間持続した活動であったり、創設当初の文物保全の営為が後の時代に改めて前面に登場した活動を1, 2あげてみる。ひとつは満洲国内の草の根的な文化にも振興の手を差し伸べるきっかけとなった昭和12年の訪日記念美術展覧会である。これは後に、満洲国文化の種まきをしたと総括されるように、満日文化協会の活動を、学術活動だけでなく満洲国固有の文化運動へと視点を転換させる契機ともなったものである。この展覧会は次年より満洲国国展として、都度日本から画家を招聘して敗戦の年まで継続されていく（正確には昭和20年は展示を終えて会場を飾ったあとに敗戦となり

展観されてはいない)。これら展覧会はのべ9回にわたって展観されたのであるが訪日記念、第一回国展、第二回国展にはそれぞれ立派な展覧会図録も刊行され、その活動の詳細をうかがうことができるものである。

もうひとつあげるならそれは満洲国建国十周年記念事業として昭和17年に上野の皇室博物館で開催された満洲国国宝展である。そこで展観された文物は、典籍（四庫全書）・満洲文大蔵経・刻絲刺繍・陶瓷で、これらはすべて日満文化協会に深く関わっていた。このうち典籍は、満洲事変直後に資料保全の名目で設立され協会も創設時は付設となった満洲国立奉天図書館の分館と称していた文潮閣のものである。満洲文大蔵経は協会常務主事杉村勇造が、協会の創設工作进行していた水野梅暁と共に昭和8年に発見したとされるもの、刻絲刺繍とは協会初発の活動として満洲国建国記念『纂組英華』と題して出版がなされた宝物である。陶瓷は湯玉麟からの逆産品などととも創設された奉天博物館のものであった。つまり協会創設時期に協会と深い因縁を持つ文物が建国10年に展観され、しかも満洲国建国記念およびこの国宝展の返礼として、日満文化協会および帝国芸術院のあっせんにより帝国芸術院会員三〇名の絵画が満洲国政府に贈呈される事態にも繋がっていくのである。

本論ではこうした日満（満日）文化協会について創設から解散までの経緯を概観したわけであるが、このうち創設時期の湖南の意見や活動、さらに羅振玉をめぐる各種人事問題などは、それぞれに日満文化協会の性格を左右する重要な課題である。しかしながらこれらを本論に挿入するといささか記述が煩瑣になるので、それぞれ補論一、補論二として別に掲げることとした。

また協会創設と平行して研究者の文化事業への助成のために設立された対満文化事業審査委員会は日満文化協会とは別組織であるのだが、メンバーも多くが重なっており関連性も深いと考えて第二部として創設事情を述べたものを入れた。

さらにまた満洲国の文化事象を論じる場合この満日文化協会はことあるごとに登場してくるのであるが、そのなかでもたとえば図書館界や出版界など周縁の事業のなかで、満洲国の出版物としていつも話題となる協会刊行物を目録化し刊行経緯や来歴を付してリストにしたものを第三部として提出した。それらは創設時の建国記念出版事業や各種学術出版、さらに後期の東方国民文庫などであるが、それはいずれも満洲の出版史においても着目すべき刊行事業である。

(論文審査結果)

申請者、岡村敬二氏より学位請求があった博士論文「日満文化協会の歴史」は、これまで、不明な点を多く残している「満洲国」の文化政策および文化事業について、解明の要となる「日満文化協会」(「満洲国」側では、満日文化協会、以下「文化協会」と略称する)について、外交文書を中心とした一次資料群、関係者の書簡等の周辺資料、回想記等から、その創設にいたる経緯、性格、活動内容の概略を明らかにし、かつ、満洲および「満洲国」文化史に関する重要な問題を指摘し、論じるものである。

その成果の第一は、「文化協会」の性格の変化を、以下の三期に分けて論じうることを確定したこと。創立以前を「前期」とし、組織陣容の確定から文化財調査研究の時期を「草創期」、一九三七年における溥儀訪日記念美術展を区切りとして、民間諸団体の活動に対する支援に重心をうつしてゆく「文化振興事業期」、建国記念十周年事業(一九四二)を区切りとして、文化振興事業の多くが「満洲国」広報処等の所管となり、事業の縮小に向かい、「満洲国」崩壊に至るまでの「終息期」の三期である。

成果の第二は、「文化協会」創立以前の「前期」において、日本の外務省が帝国大学の学者を巻き込んで行われた対支文化事業をとりあげ、その展開として、「満洲国」と日本との「国際組織」として「文化協会」を立ち上げる際に生じた諸問題を広範に指摘し、論じていることである。とりわけ「満洲国」側の中心的な学者として活躍した羅振玉の清朝文化保存にかける思想と情熱とがリードする形で、初期の学術調査とその報告書の作成が行われたこと、これによって満鉄の拠点としての大連、「満洲国」の首都「新京」(長春)と並んで、旧清朝の首都、瀋陽(「奉天」)が文化政策上の焦点のひとつであったこと、および旧清朝に対する日本側の配慮を文化事業の上でも浮き彫りにしたことである。また、それに伴い日本側の学者としては京都帝国大学の内藤湖南がキーパーソンの役割を果たしていたことが明確になり、「満洲」の学術に関する東京帝大と京都帝大のあいだの「綱引き」的な関係も浮かび上がった。

なお、本論文は、岡村敬二氏が、長く「満洲」の図書館およびその蔵書の調査研究にたずさわりその成果の上に発展させたものという性格を強くもつため、『遺された蔵書—満鉄図書館・海外日本図書館の歴史』(阿吽社、1994)および『「満洲国」資料集積機関概観』(不二出版、2004)を副本として添えること、また、論文納付の際には、学術上の意義が「前期」および「草創期」に多く認められるため、副題を「草創期を中心に」に改めるべきこと、表記等、論文としての形式をよく整えることとする。

上記のように、本論文は、今後の「満洲」文化研究に大いに資する学術的な意義が十分に認められるものであり、学位取得論文に値すると判定する。